

令和5年度千代田学について

土屋昌明

令和5年度の「千代田学」は、「文化的多様性を持つ千代田区の国際性に関する調査・研究—千代田区の街と人をめぐるフィールドワークとそのドキュメンタリー映像の制作」というテーマで、令和4年度採択の「千代田学」を引き継いでおこなわれており、11月現在、いろいろな活動に取り組んでいます。今年度は、「ウォークアブルなまちづくり」という千代田区の方向性にリンクさせ、都市社会学を専門とするスタッフを中心に、実際に街を歩くことで出会ういろいろな課題や人との出会いを重視して進めています。そして、その記録やそれによって得た考察を、映像を含めた方法で発信することをめざしています。学生によるフィールドワークを重点に置いて千代田区を捉え、普段は通勤・通学だけで認識できない千代田区民の生活を見聞し、インタビューや上映会などを通して地域の人びとと学生の交流を促進したいと考えています。参加している教員スタッフは、今井ハイド准教授、

船橋淳客員教授、根岸徹郎教授、小林貴徳准教授、上原正博教授、そして研究代表者が土屋です。以下に2023年11月までの主な活動を紹介します。

西神田エリアの商店への学生による取材と立体模型の展示

本学部異文化コミュニケーション学科の今井ハイド・ゼミでは、街を実際に歩き、そこで出会った人々と対話を重ねています。主に西神田エリアの商店の店主さんやそこで働いているかたに取材しています。それを記述して考察することにより、街が持つさまざまな顔、姿を浮き上がらせることができます。

その一環としての展示を、本学神田校舎10号館フロントで2023年6月19日(月)～28日(水)の8日間おこないました。本年度の千代田学の取り組みとして、水平面の広がりだけではなく、垂直面の高さも感じ取ることができるよう、立体模型をゼミ生が作成しました。初めての試みとして、本学10号館のある西神田エリアを中心に作成しました。

この模型から、学生たちや街角を歩く人々が、自分たちの立っている場所に対して、これまでと少し違ったイメージを持つことができます。いつも自分の足元ばかりを見てしまう視点を、私たちが

日々をすごしている千代田区の少し広い空間のなかへと置きなおす試みです。

古代メキシコ文明に関する公開講座

2023年、上野・東京国立博物館で特別展「古代メキシコ—マヤ、アステカ、テオティワカン」(6月16日～9月3日)が開催されたのにあわせ、本学部異文化コミュニケーション学科では、この特別展を20倍楽しむための企画として、広く千代田区民と一般のかたがたに向けた公



図1



図2

展示状況、西神田エリアのジオラマ、その地域を示す平面地図、ゼミ生の作成の写真



図3

図3で掲出した写真では立体模型の制作状況、森美術館におけるジオラマ展示の実地観察の様子を紹介



図4

図4は立体模型の近影。実際の建物の高さを縮尺して模型を作り、地図の上に配置、首都高速は段ボールで作成

開講座を黒門ホール(神田キャンパス10号館3階)で8月1日(火) 17:30~19:40に実施しました。異文化コミュニケーション学科2023年度公開講座「古代メキシコ文明への誘い—マヤ、アステカ、テオティワカン— 古代メキシコ展を20倍楽しむ!」と銘打って、本学部の井上幸孝教授が、メキシコ古代文明の歩みとその遺跡について、現地の写真を多く交えながら、「メキシコの古代文明」「メキシコの遺跡をめぐる」というテーマで前後2時間にわたってわかりやすく解説しました。

第1部では、メキシコを含む古代メソアメリカの特徴について整理したうえで、3500年に及ぶ文明の歩みを説明しました。「スペインによる征服で終焉を迎えたが、メソアメリカ先住民の文化は現在も存続している」ことの具体例として「死者の日」と呼ばれる祭礼などが具体的に紹介されました。

第2部では、テオティワカン、パレンケ、チチェン・イツァといったメキシコを代表する遺跡の数々を、井上教授自身が撮った写真を中心に用いて紹介しました。

井上教授の講演を受け、土屋が中国古代宗教の観点から、空間を隔てた別の文化が相似した表現に至る例をあげてコメントを寄せました。世界の地域や文化を横断的に学ぶ公開講座となりました。千代田区民が100人近く集い、井上教授への質問がいつまでも終わらなかった。

今回の講座は、昨年度の「千代田学」でメキシコ大使館の協力を得たことを引き継いでいます。講座冒頭のあいさつで、メキシコ大使館のパレリア・ソリス文化担当官より、日墨関係のさらなる深化に期待を寄せる祝辞を賜りました。

映画『谷中暮色』上映会

『谷中暮色』は、本学部客員教授の船橋淳監督の作品です。東京の下町、谷中を舞台にした若者たちのラブストーリーと、幸田露伴原作『五重塔』を素材とした時代劇とが交錯し、そこに実際の町民にインタビューするドキュメンタリー映像が織り込まれるという凝った構成の映画です。焼失した五重塔を中心に、現代と江戸を行き来するフィクションと、谷中の姿を捉えたドキュメンタリーが

一体となり、失われた過去の街の生活の意味を問いかけてきます。ホームムービーを保存・修復するNPOで働く女性、かおり(佐藤麻優)は、昭和32年に焼失した谷中の五重塔と、それを記録した8ミリフィルムが存在するらしいということを知り、地元谷中のお寺、霊園の墓守、伝統工芸の職人、郷土史家に取材をしていきます。その過程で彼女は、地元の青年、久喜(野村勇貴)と出会います。それと並行して、時代を遡った江戸中期に舞台は移り、五重塔建設に燃える大工の十兵衛(野村・二役)は、親方や妻お浪(佐藤・二役)の反対を押し切って、独力で塔を作り上げようとしていきます。

本作は、映画の作り方として興味深い点がいくつもあります。第一に、一人二役を通して、現代の2人の若い男女のドラマと、江戸時代のドラマとが重なり合う点です。これにより、過去のドラマに対して現代人から見たある種の共感が持たれるとともに、露伴の原作が持つモチーフの投影が現代のドラマに反映するという現象が生じます。例えば、久喜のかたくなな性格と街のゴロツキとの衝突には、露伴が描いた十兵衛の江戸っ子的な味わいが投影されているようです。また、露伴の原作で十兵衛のあだ名は「のっそり」とされており、劇中の地元の青年・久喜の演技には、そんなのっそり感が漂っています。露伴の擬古文に登場する語彙の多くは、現代では通用なくなっていますが、この「のっそり」は今でも生きた言葉で、それを監督は劇中にうまく取り入れているのがわかります。



図5 講演する船橋監督

第二に、中心的な青年たちの仕事が、ホームムービーを保存・修復するNPOという設定である点です。かつてデジタル以前に撮影された8ミリや16ミリの映像、ハンディカムなどで取られたビデオテープの映像は、世代交代につれてどんどん廃棄されているのが現実です。こうした映像には、ありし日の庶民の日常が記録されており、非常に重要です。これを収集・修復・保存・上映する活動は、今ではなおざりにされています。本作は、物語のこのような設定により、過去の映像の重要性、それがもたらす人々の過去への愛着、過去から現在へと続く生活の大切さを表現しています。これにより、劇中にはフィルムを上映するシーンが登場し、そのスクリーンには実際のホームムービーの映像が使用されています。つまり、映画の中で映画が上映されるのです。その映像は、まったく個人の過去の生活にすぎないものではありませんが、劇中における設定ともあいまって、妙に感動を催させるものがあります。他人の子ども時代だったり、昭和の風景だったりするものが、あたかも自分の子ども時代が再現されているような感覚をもたらしませず(もちろん見る者の世代によって違ってしまうが……)。

第三に、ドラマとドキュメンタリーが交錯する構成になっている点です。第二にあげたホームムービーの上映がやはり実際の上映であり、ドキュメンタリー的な手法ではありますが、俳優がインタビューする場面は実際のインタビュー映像です。シーンの中には、俳優ではなくて、監督本人がインタビューしている映像もあります(会話の声でそれとわかる)。この点こそ、千代田区でフィールドワークをしようという私たちのプロジェクトが参照すべき本作の特徴です。ドキュメンタリーとドラマの境界がますます曖昧になっていっているというのは、船橋監督の持論で、現在の世界の映画シーンを言い当てています。この作品は、そうした情勢を意図的に創作に持ち込んだものです。ある意味、私たちのプロジェクトは、その意図的な創作のドキュメンタリー的な側面を切り取って参照しようとしており、あるいは本作の方向性にたがうともいえます。しかし私たちとしてはむしろ、フィールドワークによる取材が持つ可能性の一つとして受け取る

べきだと考えています。

千代田区における学生のフィールドワーク

今回の千代田学の実施を機に、私のゼミでは、千代田区に立地する専修大学の教員・学生でありながら、地元に対してまったくコミットしておらず、関心もほとんど抱いていないという現実を反省させられました。そして振り返ってみると、現在の神田神保町界隈は大規模再開発が進められており、地元根差した生活や古き良き商店などが次々と消失していつかという現実には気づかされました。例えば、すずらん通りに並んでいたスケートボードとろしあ亭は、相次いで閉店になりました。すずらん通りの南側は、かつては本の間屋さんが何十軒も立ち並んでいましたが、現在は東京パークタワーと神保町三井ビルディングが屹立しています。個人的な思い出を記させていただくと、先日、このエリアにある和菓子屋さんに取材したところ、店の正面に小堀遠州の手紙の茶掛けがかかっており、店主さんもこのような茶掛けを読み解く達人だった波多野幸彦先生に教をいただいていたということとで話に花が咲きました。この波多野先生の事務所は、かつてすずらん通りの裏のアパートにあり、学生だった私は、道路から木の階段をギシギシと登って行って、波多野先生にくずし字の読み方を教わったものです。このような記憶は、神田神保町に特有のものであり、いまこの時代に記録しておかなければ、まったく消失してしまうと思われます。

このような事態は、なにも神田神保町に限られているわけではありません。例えば、地下鉄半蔵門駅前にあるお店にきんつばを買いに行ったところ、2023年11月で閉店すると告げられました。この麴町や番町のエリアは、かつて武家屋敷があったところで、和菓子店もその需要が頼りだったのですが、いまはそうした古い家が相続税に耐えられず、大手の不動産会社を買われ、大きなビルに変わっていくとのことでした。専修大学の所在する千代田区西神田エリアに限ってみても、巨大な変化が起こりつつあるのです。

そんなわけで、私のゼミのフィールドワークは、

今井ハイデ先生とは別行動で、こうした昔から神田界隈を承知しているかたがたに聞き取りを続けています。例えば、地元の靴屋さん、タバコ屋さん、和菓子屋さん、かつて印刷工場を営んでいたかた、本の「箱」を制作する工場を営んでいたかた……。

そのプロセスで並木道の再開発の問題に行きあたりました。神田警察署前の大通りには、西の共立女子学園の前から神田駅まで、約1キロにわたって銀杏並木があります。共立女子学園の前の銀杏は100年近くの樹齢らしく、立派な並木として保存されています。ところが、そこから十字路を渡った学士会館前の並木は、すでに6本が伐採されています。周辺住民には、この銀杏並木の伐採に納得できないかたがたがおられ、伐採工事は2023年11月現在、ストップしているようです。かといって、周辺住民と行政との話し合いもおこなわれていないようです。この事態は、現に千代田区神田エリアで起こっている現実であり、私たちとしても重大な関心を持っています。これは、都市設計におけるパブリック・スペースの問題とも絡んでおり、都市社会学的な考察も必要になります。近辺に類例があり、例えば明治大学のリパティータワー前の歩道は再開発されて、明治大学のパブリック・スペースと相まって、相当に広いスペースとなっています。その再開発の際、街路樹のプラタナスが伐採される予定だったのですが、明治大学教員有志の働きかけで、現状のように美しい並木が保存されました。それに対して、そこのスペースよりお茶の水駅寄りの歩道では、並木が植え替えられて、明治大学前に比べて相当劣る景観になっています。他にも、新宿区の話ですが、神宮外苑の樹木の伐採と巨大再開発が、区民だけでなく、都民の財産、ひいては日本国民の財産をないがしろにするものだという批判も巻き起こっています。

このフィールドワークは私のゼミ生が中心となって進めており、ほぼ毎回、船橋監督がボランティアで参加し、撮影や録音の方法を手ずから学生に教えています。この場を借りて、謝意を表します。

映画『私だけ聴こえる』上映会



図6 伐採後に「ひこばえ」が生えてきた銀杏の樹

2023年11月8日(水) 16:35から、松井至監督のドキュメンタリー『私だけ聴こえる』(2022年、76分)を本学黒門ホールで上映後、監督と本学部の河野真太郎教授との対談を同5階10052教室でおこないました。

本作は、コードという言葉が生まれたアメリカでコード・コミュニティを取材した初めての長編ドキュメンタリーです。「コード(CODA)」とは、耳の聴こえない“ろう”の両親から生まれた、耳の聴こえる子どもたちの英語(Children Of Deaf Adults)の略称です。コードは、家では手話を、外ではオーラルの言葉を使います。それゆえ、学校では“障害者の子”という扱いをうけ、その一方、“ろう”からは距離を置かれてしまいます。つまり彼らは、聴こえる世界にも、“ろう”の世界にも居場所がないのです。

監督は、彼らのうち、3人にスポットをあてます。「私はろうになりたい」という深い欲望を秘めているナイラは、聴力に異変をきたしてしまいます。ジェシカは、自分を育ててくれた“ろう”の母から離れて、大学に進学したいと葛藤します。3人目のMJは、コードである自分の人生を手話で物語るこ

とで自分を肯定し、同じ仲間を求めています。そしてもう1人、手話通訳士をするアシュリーは、コードとしての葛藤を乗り越えているように見えながらも、妊娠を機に「お腹の子が“ろう”になるか聞こえる子になるか」という悩みを抱えてしまいます。

本作は、2016年TokyoDocsで最優秀企画賞、2021年に北米最大のドキュメンタリー映画祭HotDocsに選出、令和4年度が最後となる文化庁記録映画大賞を受賞しました。

本作を千代田学の企画として上映・討論したのは、直接的にはもちろん私たちの身近や千代田区にも“ろう”やコードのかたが住んでおりながら、私たちの視界には入らない傾向が強いのを反省してのことです。この点について、松井監督が次のように語ったのが印象的でした。

松井監督は、東日本大震災について2015年にNHKワールドという番組を任せられ、その中で東日本大震災の復興に関して撮ることになっていました。そのとき、地震があってから、津波が来るまでの時間に何が起きたのか、もしかして、音が聞こえない人が気づかずにいたんじゃないのか、その画が思い浮かんだ、ということです。

『私だけ聴こえる』の上映では、私たちの視界は非常に狭いという反省と同時に、コードが持つ苦悩だけでなく、文化的な個性にも注目したいと考えました。手話を一種の言語翻訳だと考えた場合、コードはバイリンガルとして育てられたことになりますが、言語コミュニケーションの機能だけでなく、“ろう”の親の生存に欠かせない存在ともされています。このような状況は、どんな言語のバイリンガルよりも過酷であり、コミュニケーションの問題としても重要だと考えます。

以上、2023年度千代田学の11月までの活動を簡単に紹介しました。関係各位のご協力に感謝申し上げます。